

## 冒険学校は「冒険」なのか（中編）

「溶解体験」としての「遊び」

宮坂朋彦（みややん・自然文化誌研究会 運営委員）

前回、ジブリ作品や絵本に共通する「行きて帰りし物語」という構造を紹介した。また、「かいじゅうたちのいるところ」を例に、子どもが遊びに夢中になっているような体験が、日常の生活とは異なる人間の在り方を示している、ということに仄めかしたところで終わった。

行きて帰りし物語の構図から示唆されるのは、「遊び」が、日常生活（ご飯の匂い）と非日常（かいじゅうたちの島）を行き来することによって、深い生の経験をもたらしめているという事実である。今回は、日常の生活とは異なる人間の在り方とはなんなのか、そして、「行きて帰りし」の構造が、いかに冒険学校の体験と通底しているのかに迫っていこう。

### 3. 有用性と日常世界

前回見たように、「行きて帰りし物語」的な構造を持った「遊び」の最大の特徴は、**時間や空間といった日常的な感覚が崩れていくことにある。**

ひとくちに「遊び」といってもさまざまである。スポーツやカードゲームなどを含め、ルールがあって競い合うような、いわゆる「ゲーム」と言われる種類の遊びには、こうした日常的な感覚の崩壊という特徴はあまり見られない。というのも、「ゲーム」的な遊びに見られる目的を達成するための合理的思考は、日常世界における思考と地続きであるためである。

矢野によれば、日常世界というのは労働をモデルとする有用性の世界である。有用性の世界では、基本的に何かを行う「わたし」と何かをされる「あなた」や「なにか」あるいは「道具」というふうに、「自己」というものがはっきりしていることで、「客観的に」判断しながら行動することが求められる。難しい言い方をすると、人は、自分と対象を分節化することで、理性的に生活することができるのである。

一方、「かいじゅうたちのいるところ」が典型的に示すように、「ごっこ遊び」のようなたぐいの「遊び」に顕著なのは、こうした日常の「合理的」な感覚の解体である。よく「世界に入り込んでいる」という言い方をするが、ごっこ遊びの絶頂は、まさにその遊びの世界と自分自身とが溶け合うくらいに密着している時である。このとき、一歩引いて「うまく」やろうとしたり、ルールを決めようとしていたり、一旦休憩したり、ともかく「合理的」な思考がひとたび支配的になると、「さめて」しまうことがしばしばある。そこからもういちど、遊びの世界に没入するためには、少し時間がかかることも多い。これは、「遊び」を「客観的に」見てしまうと、そもそもなぜこんなことに夢中になっているのか？と、子どもは日常生活に引き戻されてしまうためである。

### 4. 溶解体験

このような没入体験のことを、矢野は、ジョルジュ・バタイユ（Georges A. M. V. Bataille, 1897-1962）や作田啓一（1922-2016）などを援用しながら、「溶解体験」と呼んでいる。「溶解」という言葉が示しているように、遊びを代表例に、優れた芸術作品に接したとき、自然に畏怖を感じたときにも共通する、**世界と自己の境界線が溶けあってしまうような事態**を指している。

普通、教育や学習というのは有用性の世界で語られる。例えば、ごっこ遊びを有用性の尺度で図ると、それは「コミュニケーション力が育まれた」とか、「家事についての知識が身についた」とか、何かの「役に立った」こととして評価されることになる。一方、溶解体験は、日常世界における有用性の尺度では測れない、「生きていること」そのものと触れ合うような経験ということが出来るかもしれない。矢野は、こうした溶解体験でしか得られない教育の位相を、「生成としての教育」と呼んでいる。

私たちはこうして、深く体験することによって、自分をはるかに超えた生命と出会い、有用性の秩序を作る社会的な人間関係とは別のところで、自己自身を価値あるものと感じることができるようになる。未来のためではなく、この現在に生きていることがどのようなことであるかを、深く感じるようになる。このような体験による教育を、「生成としての教育」と呼ぶことにしよう。

(矢野 2008:125-6)

さらに、「溶解体験」が教育や学習として健全に機能するのは、日常生活へ戻るという回路が確保されている限りにおいてであるという。つまり、「行きて帰し物語」に象徴される「遊び」とはまさに、世界と一体化してしまうギリギリのところまで踏み込みながら、再び日常世界へ戻ってくるという意味で、ある種の「冒険」と呼ぶことができる。これは、いわゆるアウトドア・サバイバルとしての冒険・探検よりも広い意味での「冒険」が、子どもの遊びのなかに内在しているということを示唆している。

では、冒険学校という教育の場において、こうした「生成としての教育」へつながるような「冒険」を、いかに看取することができるだろうか？

(次回へ続く)

矢野智司, 2008, 『贈与と交換の教育学：漱石、賢治と純粹贈与のレッスン』東京大学出版会.

---